

ムラへ向かう若者たち ムラの可能性の蘇り

先日、NPO 法人地球緑化センターによる緑のふるさと協力隊研修の講師に招かれ、山梨県のある山村地域を訪れた。

緑のふるさと協力隊とは、主に 20 代から 30 代の若者たちが各地の農村や山村に派遣され、1 年間暮らしながら地域の活動に従事する活動だ。協力隊員の若者たちはほとんど都会出身。田舎のことはほとんど何も分からないといっても過言ではないだろう。大学生や会社員だった彼らは休学したり、会社を辞めたりなどして、この活動に志願してきているわけである。そういう意味では彼らは正規ルートの生き方から変更してきていると言えるだろうと思う。若者たちは月 5 万円の生活費を支給され、派遣先の風習を学びながら、1 年間田舎の暮らしと生業にかかわることになる。

各地に派遣される若者たちのために 1 週間の研修プログラムが用意されている。その後半の部分でムラでの住民とのコミュニケーションの取り方、風習や文化をどのように学ぶかなどについて実践的な指導をしてほしい、そんな地球緑化センターの要請があつて筆者はこの研修にかかわることになったのである。だが結論的に言えば、筆者の方が彼らから学ばせられることが多かったのである。

今年の協力隊員は 50 名あまり。年々希望者は増えているという。筆者は 2 泊 3 日で行動を共にした。初日は夕方に現地に入って彼らに出会った。夕食や夕食後の講演で話をしてみると何と素直な人たちだろうかと思われ、好印象を持った。こんな率直で普通の若者たちが、純粋に田舎にあこがれ、その暮らしに興味を持ち、不安を抱えながらも素直にこの活動を志願してきているということがよくわかった。

翌日、1 日かけて山梨の山間集落にいくつかの班に分かれて入り、地元の方々と一緒に回りながら集落の暮らしや生業について調べて回った。いわゆる地元学という手法で、デジタルカメラと記入用紙や地図を持って、地元の方々と一緒に歩きながら、見つけたモノ・コトについて質問しながらムラのことを学んでいく。この活動のポイントは地元の方々にきちんと質問ができるか、ちゃんと話が聞けるかということである。これが結構難しい。なまじ田舎の知識があるとそれにとらわれてその地域の特徴や特殊事情を見逃してしまうし、都会の常識でひねくれてみようとするといくらでも否定的にムラの物事が見えてしまうからだ。

しかし協力隊員の若者たちは、積極的な目線でムラを見て回り話を聞いてきていた。周囲を高い山々に囲まれ急峻な地形にへばりつくように形成された山村集落。ほとんど米も取れず、かつてはひえやあわ、小麦などを食べて命を繋いで来たという地域の暮らし。ともすれば村人自身によって否定的に語られるムラの実情。しかし協力隊員の若者たちはそこに様々な希望を見出していた。何でも自分たちで育て自給していくという暮らし。様々な工夫を凝らした地域独自の道具の数々。自分のことだけではなく隣のことを気にかけて助け合うムラの風習。地域内のコミュニケーションから生まれる笑い話の数々。

最終日。調べたことを発表した。それは若者たちが素人ながらも純粋な目線でムラの様々な蘇りの可能性を見出そうとするものだった。確かにわずか 1 日ムラを回っただけで地域のことをよくわかったとは言えないし、ムラの良さはこうだと判断することはできないだろう。しかし彼らのように一生懸命にムラを肯定的に見ようとする若者たちが入っていき学ぶこと、そのこと自体に価値があるのではないだろうか。それはムラの未来を、忘れかけていたムラの良さや生き方の蘇りの可能性を、掘り起こしていくためのよすがとなる、そのように思ったのだった。